

<特集 1 「PHYSOR2014」の報告>

PHYSOR2014 に参加して

近畿大学大学院 総合理工学研究科
エレクトロニクス系工学専攻 博士前期課程 2 年
奥田 遼平

私は、京都で開催された PHYSOR2014(会期:2014 年 9 月 28 日~10 月 3 日)において、「AN IMPROVED FEYNMAN- α CORRELATION ANALYSIS WITH A MOVING-BUNCHING TECHNIQUE」というテーマで研究発表をしました。この国際会議で研究発表することは約 2 年前から決まっていた。その理由は、4 年生になり研究室に配属され、指導教官である橋本先生に進学希望を申し出た際、「国際発表に挑戦しよう。」と伺ったためです。英語は苦手でしたが、学生の中にこのような経験は出来ないと思い、挑戦することにしました。PHYSOR2014 までに、原子力学会で 2 回、研究発表の経験がありました。そのため、国際会議も同じような雰囲気だろうと思っていました。しかし、準備を始めると全く違うものでした。プレゼンテーションの資料の作成を夏休みから開始しましたが、片手に英語の辞書を持ちながらとなりました。初めて作成したプレゼンテーションの資料を橋本先生にご説明申し上げた際、内容では無く、私の英語に対して大幅な修正を賜ったことを鮮明に覚えています。プレゼンテーションの資料完成後、第 2 の大きな壁が待っていました。それは、英語の原稿を作成し、暗記することでした。幸いにも、研究室にはマレーシアの留学生が所属していたため、作成した原稿を何度も確認してもらいました。先生から「合格」を賜った際には、まだ発表前にも関わらず、思わず笑顔になりました。その後、研究室で連日練習をしました。

さて、PHYSOR2014 が始まり、電車で会場に向かうと、京都という歴史的な街のど真ん中に、大きなホテルがありました。私はそこで、国内学会とは比べ物にならない大きさの会場に圧倒されたことを覚えています。また、会場の周りを見渡すと、外国人ばかりであり、英語が飛び交い、「本当にここは日本なのかな。」と行ってしまいました。発表の雰囲気をつかむため、自分が発表する会場に向かい、他の発表を聴講することにしました。会場に入ると、今度は、会場の広さと聴講者数に圧倒され、あの壇上に上がり、自分が発表することを想像すると緊張が増してきました。発表を聞きながら、「本当に自分の英語は通じるのか。」「発表の瞬間、「フリーズ」したらどうしよう。」等の不安が襲ってきました。さらに、質疑応答も英語で激論が飛び交い、「自分の発表の時もこんなに追い詰められるのかな、相手の英語が聞き取れて、答えられるだろうか。」と

いう心配が増してきました。

発表の前日には、プレゼンテーションの資料の再確認をして、翌日に備え早く就寝しようと思いましたが、緊張のあまり十分に眠れませんでした。そして発表当日、私の発表は朝一番の 8 時ということもあり、1 時間程前に会場入りしました。「こんな時間に聴講者はいるのかな。」と思っていたのですが、会場に入ると半分以上の席が埋まっていました。しかし、先生や研究室の後輩から激励の言葉をもらったため、壇上に立つと緊張感が無くなり、「十分に力を発揮すれば大丈夫。」という気持ちに変わりました。そのため、落ち着いて練習通りに発表することができ、余裕を持って会場を見渡せることが出来ました。一方、質疑応答では、内容を聞き取れずに慌ててしまい、「何か答えないといけない。」という状態に陥ってしまいました。しかし、橋本先生に助けて頂き、無事乗り切る事が出来ました。質疑にあまり答えられなかったことは心残りでしたが、発表後、多くの人から、「とても良かった。」という言葉を賜わり、力を出し切ったという気持ちに変わりました。

今回初めて、国際会議で研究発表をすることにより、英語でのコミュニケーションの難しさや必要性を実際肌で感じる事が出来ました。また、拙い英語でも相手に自分の研究内容が伝わり、意見交換が出来る喜びも感じました。このことは自分にとっても良い勉強になり、自分を一回り成長させることが出来たと思います。社会人になっても積極的に国際会議に自ら参加したいと思えます。また、研究室の後輩達にも国際会議には、積極的に参加することを勧めていきたいと思えます。

最後になりますが、今回の PHYSOR2014 を無事に終えることができたのは、多くのご指導を頂いた先生方、参加の後押しをしてくださった研究室の先輩のおかげでありました。

この場をお借りしてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。



写真 1 発表会場の様子



写真 2 発表の様子